

天理市埋蔵文化財調査概報

(平成11年度・国庫補助事業)

柳本藩邸遺跡 (第6次)

西乗鞍古墳

2000

天理市教育委員会

例 言

1. 本書は、天理市教育委員会が平成11年度国庫補助事業として実施した柳本藩邸遺跡（第6次）および西乗鞍古墳外堤における発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は、天理市教育委員会社会教育課文化財係が実施し、柳本藩邸遺跡の調査を技術吏員青木勘時、西乗鞍古墳外堤の調査を主任泉武と青木が現地調査を担当した。
3. 本書収録の調査の調査地および調査期間は以下の通りである。

柳本藩邸遺跡	調査地：天理市柳本町1141番地ほか
	調査期間：平成11年10月1日～10月29日
西乗鞍古墳	調査地：天理市杣之内町字山口方102番地の1ほか
	調査期間：平成11年11月4日～12月10日
4. 現地調査から遺物整理作業および本書作成に至るまで下記の方々の御助力を得た。記して謝意を表する。

松本寿子・奥井智子（奈良大学学生）、石田由紀子（立命館大学学生）、金子敬徳（天理大学卒業生）、芳村信芳、中森富美代、藤岡早希
5. 現地調査および出土遺物について、下記の方々から有益な御教示、御指導を賜った。記して厚くお礼申し上げる次第である（敬称略・順不同）。

山内紀嗣・高野政昭・竹谷俊夫・金原正明・日野宏（天理参考館）、坪之内徹（奈良女子大学埋蔵文化財調査室）、山川均（大和郡山市教育委員会）、嶋谷和彦（堺市立埋蔵文化財センター）、北野隆亮（財団法人和歌山市文化体育振興事業団）、今尾文昭・青木香津江（奈良県立橿原考古学研究所）
6. 本概報の編集は青木勘時がおこない、柳本藩邸遺跡を青木、西乗鞍古墳を泉がそれぞれ執筆した。また、報文の一部については調査担当で分担し、文末に文責を記した。

目 次

柳本藩邸遺跡の調査

I. 調査の契機と経過	2
1. 柳本藩邸遺跡について	2
2. これまでの調査成果	3
3. 調査の契機と経過	4
II. 調査の概要	4
1. 層序	4
2. 検出遺構	6
3. 出土遺物	8
III. まとめ	16

西乗鞍古墳の調査

I. はじめに	18
1. 調査の契機と経過	18
2. 西乗鞍古墳の概要	18
3. 基壇状施設における法面崩壊の状況	18
II. 調査の概要	20
1. 崩壊法面の調査	20
2. 北調査区の調査	20
3. 南調査区の調査	21
4. 出土遺物	(青木) 22
III. まとめ	24

柳本藩邸遺跡（第6次）の調査

I. 調査の契機と経過

1. 柳本藩邸遺跡について

柳本藩邸遺跡は、天理市南部の柳本町に所在する江戸期柳本藩の邸宅およびそれに付随する武家屋敷等を含む城下町一帯を指す。近世における柳本藩の成立は、慶長5年（1600年）に織田有楽斎が関ヶ原合戦での功績によりこの地に知行地を与えられたことに始まり、元和元年（1615年）には有楽斎の五男である尚長に譲渡され寛永年間に藩邸の建築が始まったと伝えられている。その後、明治4年（1871年）の廃藩置県まで13代約250年間この地の織田家による治世が続いていた。この間に文政13年（1830年）11月2日の火災により藩邸は焼失し、天保7年（1836年）より再興され9年後の天保15年（1836年）3月に竣工したという記録が残されている。

現在、柳本藩邸の旧状を伝えるものとして江戸末期、嘉永7年（1854年）の「柳本陣屋絵図」が残されているが、それ以前については不明である。次に、絵図と現状の比較から柳本藩邸の範囲を考えると、今回調査地の西側に対面する天理サンアピリティー付近を北限とし、南限は柳本小学校の南西100mにある織田家の菩提寺である専行院から天神山古墳西側の伊射奈岐神社までを結ぶ東西方向の市道辺りまでとなる。また、東限は伊射奈岐神社より北方に残る堀と土塁跡の名残となる現状の地割から判断でき、西限は黒塚古墳の南西に西門（大手門）の風情を残す石垣が現存するところまでである。藩邸の中樞をなす屋敷は現在の柳本小学校にあり、これを中心として東西約300m、南北約350mの範囲で家臣の屋敷が営まれていたことがわかる。

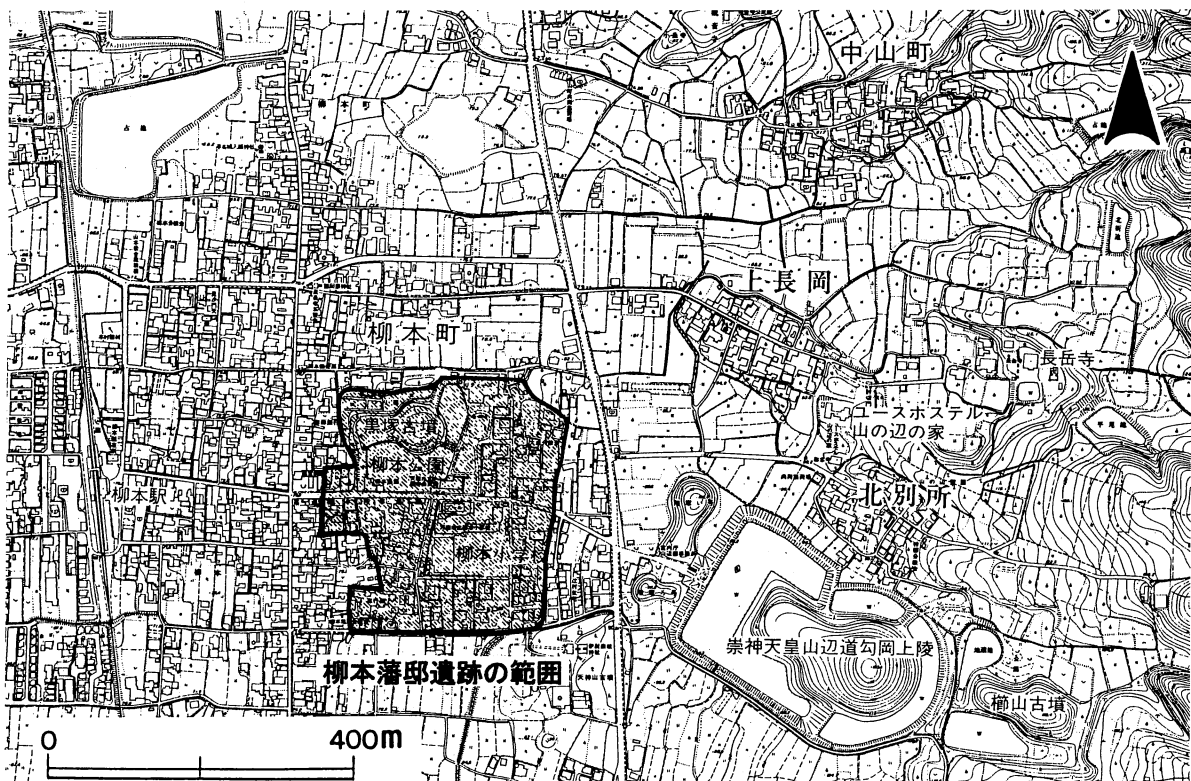


図1 遺跡の位置図 (S=1/10000)

2. これまでの調査成果

柳本藩邸遺跡に関する発掘調査は、昭和56年（1981年）に天理サンアビリティー建設に伴う奈良県立橿原考古学研究所による調査が最初であり、その後は天理市教育委員会が小学校内建物の増改築や公園整備等の公共事業に伴い、これまで6次にわたる調査を継続的に実施している。以下、各調査の成果を概観しておきたい。

黒塚東遺跡の調査 [昭和56年(1981年)]

柳本陣屋絵図が示す藩邸北端部における調査である。北門推定地に近接する地点における調査であったが、北門への通りに西面する「味岡五平」、「味岡三朗兵衛」の家

臣屋敷跡に該当する地点に調査区が設けられた。調査では近世の井戸3基、屋敷地の区画溝2条等が検出されている。

第1次調査 [昭和59年 (1984年)]

天理市教委としての初の発掘調査である。天理市立柳本小学校屋内運動場新增改築工事に伴う事前調査として実施された。調査地点は柳本藩邸の屋敷地となっていたところに該当し、「御殿」の呼称を残す土地柄であった。調査では建物跡は検出されず、中世の井戸、近世以降の整地等の地業に伴う暗渠等の排水施設が検出されている。中世遺構については近世以前の楊本氏の本拠地であることの裏付けとなった。また、2mにおよぶ整地土層については各層に包含される遺物の在り方から文政13年（1830年）の火災以降の天保7年から15年にかけての藩邸復興に伴う大規模な整地と考えられており、柳本藩邸跡の発掘調査における一つの基準が得られている。

第2次調査 [昭和60年 (1985年)]

第1次調査に引き続き、天理市立柳本小学校校舎新增改築工事に伴って実施された。調査では文政13年（1830年）の藩邸火災時の焼土面と寛永年間（1624～1644年）の藩邸造営時の整地面との2時期の遺構面が検出されている。

第3次調査 [昭和62年 (1987年)]

天理市立柳本小学校のプール建設予定地の調査であった。地山面までの深さが約3mにも及んだがその間に3層の堆積層を確認している。各層上面での遺構検出は確認できず、最下層の地山面にのみ石組み遺構が検出されている。この面より上位であっても幕末頃の日常雑器が出土していることから藩邸終焉時にも大規模な整地がおこなわれたことが知られる。

第4次調査 [昭和63年 (1988年)]

柳本小学校の北側に所在する柳本公園の整備事業に伴う調査である。調査ではそれまでの調査成果とは異なり、17～19世紀の遺構群を検出している。それらについて近世前葉～中葉、近世中

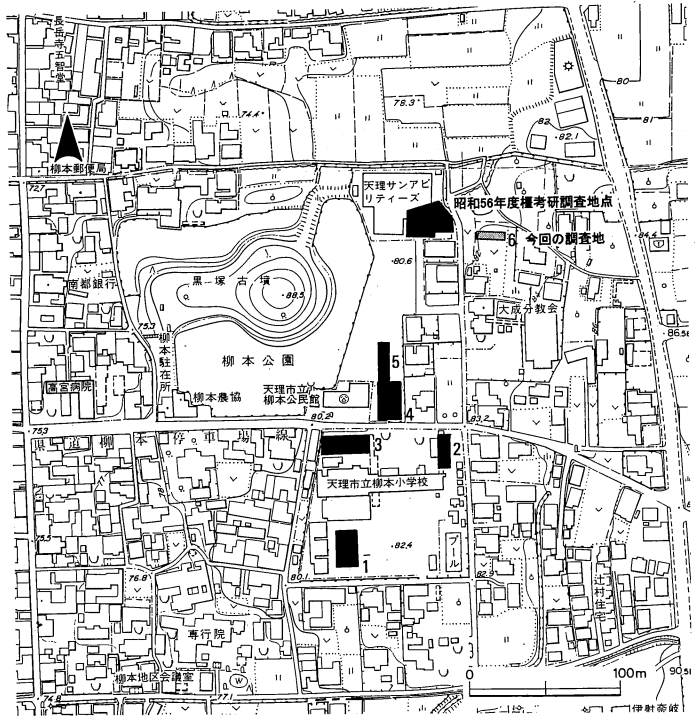


図2 今回の調査地とこれまでの調査地点 (S=1/5000)

葉～後葉、近世末期の3時期にわたる変遷が窺えることから、藩邸の周囲に土塁を巡らす以前の時期を17世紀～18世紀前葉、谷筋と藩邸が立地する尾根筋との境に土塁、区画溝を築く時期を18世紀中葉～19世紀前葉、土塁に替わり石垣を築いて平坦地形に改変が進んだ時期を19世紀中葉以降とする年代観の提示がなされた。つまり、19世紀中葉を境目として、自然地形を取り入れた藩邸の景観から石垣による区画がなされた城郭へとの変化を読み取れるものと判った。

嘉永7年(1854年)の「柳本陣屋絵図」に見られる景観はその直後の様子を伝えるものとなる。

第5次調査 [平成2年(1990年)]

公園整備事業に伴う調査として実施されている。第4次調査区の北側における調査であり、近世以前の遺物包含層は確認できなかった。調査は、第4次調査時検出の谷筋の続きを約3.5mの深さまで掘り下げたものであったが、結果的には19世紀以前の自然地形の復元がなされることとなった。

3. 調査の契機と経過

前項で記したような既往の調査成果から柳本藩邸遺跡について多くの知見が得られていた。今回の第6次調査は、遺跡範囲の北東限に近い柳本町1141・1144・1145-3番地において個人住宅建設に伴う事前調査として実施したものである。当該地は嘉永7年の「柳本陣屋絵図」に描かれた南北方向の石垣が現存し、藩邸東辺の屋敷地の並びに北接する部分でもあった。また、昭和56年の奈良県立橿原考古学研究所調査地点(黒塚東遺跡)とは里道を挟んで隣接する位置関係にあったため、近世以前の遺構の存在も予想される地点であった。

調査は、先述の石垣に近接して幅4mを基調とした調査区を設定し、東西方向に約18mの長さまで掘り進めた。また、絵図に記載された石垣の裏込め部分の断ち割りを目的として部分的に調査区南辺を延長して確認をおこなった。現地における調査は平成11年10月1日より開始し、10月29日にすべての作業を終了した。実働25日間を要し、総調査面積は約80㎡であった。

II. 調査の概要

1. 層序

調査地は現状では標高82m前後の畑が広がる平坦地であった。これらの耕作土(第Ⅰ層)は現地地表下0.3～0.4mまでおよび、直下より近世遺物を多量に包含する褐灰～褐色の粘土ブロック混じり砂質土を基調とする人為的な堆積層(第Ⅱ層)を確認している。しかし、その層相は一様ではなく調査区の東西では遺物内容も異なり若干の時期差を示す。これらについては概ね近世末期・幕末～明治初頭頃の時間幅に収まるものである。次に、これより下位では、調査区西半にのみ層序が確認され、東半では第Ⅱ層直下で地山となり直上で近世遺構を検出している。第Ⅲ層以下では全体に西～西北方向に緩かな傾斜を示す堆積となる。調査区西半の全面に層厚0.1m前後の多量の炭・焼土混じり土(第Ⅲ層上面)が拡がり、これを介在しつつにぶい黄褐色粗砂混じり砂質土が地山(第Ⅴ層)直上まで続く。この間層は中世～近世前半期の遺物包含層であり、上半(第Ⅲ層)とやや粘質の下半(第Ⅳ層)とに区分される。なお、直下は黄褐～明黄褐色粗砂混じり土を主体とする地山(第Ⅴ層)となり中世遺構検出面となっている。

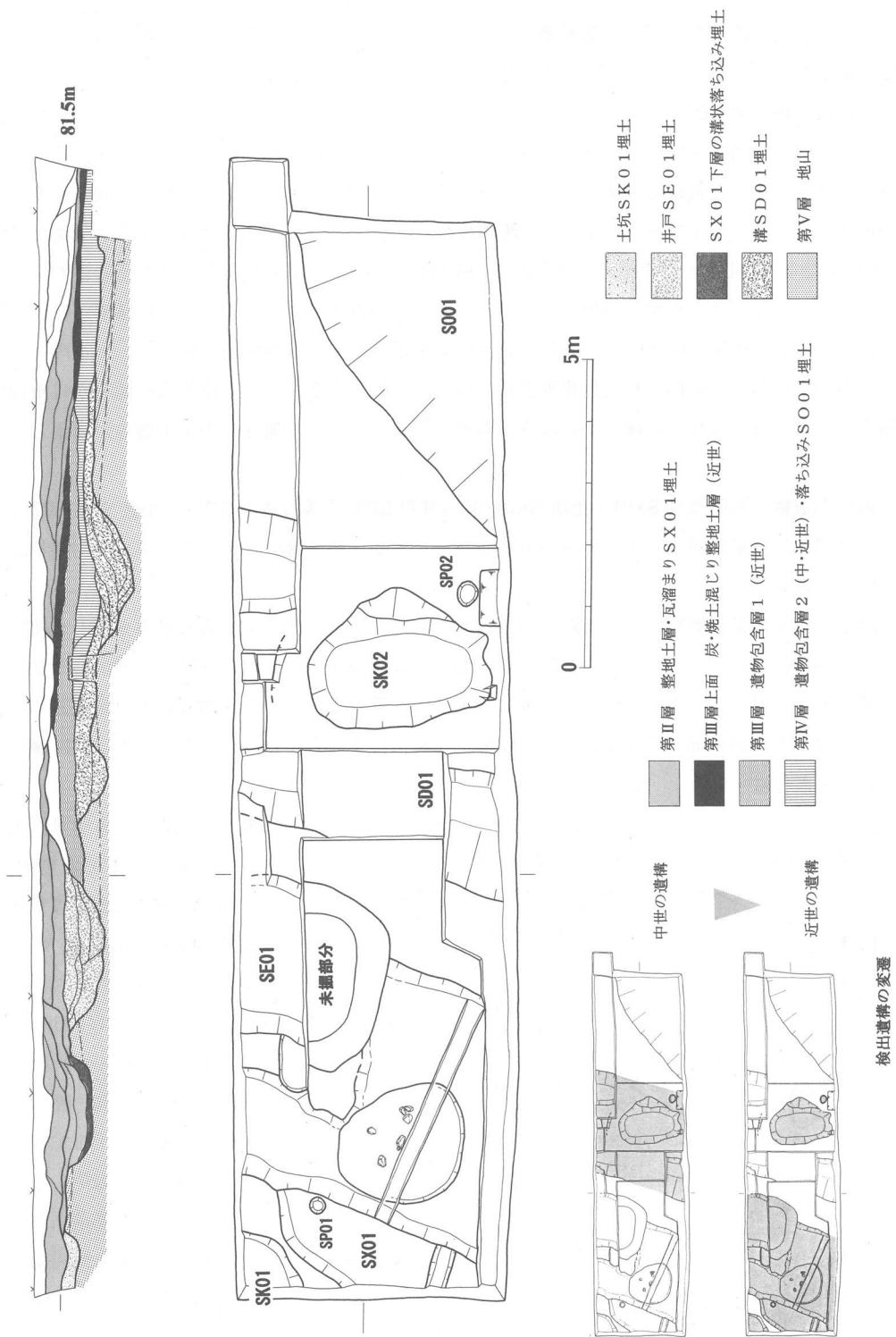


図3 第6次調査区平面・土層図 (S=1/100)

2. 検出遺構

今回の第6次調査地点では、第V層地山面検出の中世遺構面と第III層近世遺物包含層上面の2面の遺構検出面を確認している。以下、時期を追って概観しておく。

中世の遺構 [溝 SD01]

下層遺構面は調査区中央西寄りで部分的にのみ確認しているため、これが唯一の検出遺構である。上部に上層の近世遺構が重複する関係から完掘には至っていないが、溝幅と方向、時期の特定可能な土器類の出土を確認している。溝SD01は、検出時で上面幅約5m弱、深さは最深部で約0.6mを測る。北北東～南南西に方向を取り、断面形状において溝の両側縁で2ヶ所の落ち込む部分が認められることから数度の掘り返しがあったことが推測される。溝埋土の堆積層序は西側縁では溝底面より褐灰～灰黄褐色の細砂、粘土、砂礫混じり土の互層堆積が続くが、上位の東側縁からの掘り込みでは灰褐～暗褐色粗砂混じり砂質土と層相が変化し、層位的にも明らかに重複関係を示している。これらの埋土からは土師質皿・羽釜、瓦器椀・皿等の中世土器片が出土している。

近世の遺構 [瓦溜まり SX01・土坑 SK01・02・井戸 SE01・落ち込み SO01・小穴 SP01・02]

近世遺構は、第IV層より上位の検出遺構全般となるが、第II層の近世末期・幕末～明治初頭までの時期幅を示す。

調査区西端の第IV層を除去した際、地山直上を北西方向低く傾斜する落ち込みSO01を検出している。南東側の肩部から最深部までは約0.3mの比高差を測り、にぶい黄褐色の砂混じり粘質土を基調とする埋土には中世土器片を主体に若干量の近世初頭頃までの土師質土器や陶磁器片を含んでいた。人為的な掘り込みではなく自然地形の起伏によるものと考えられ、埋土は第IV層下部として位置付けられる。

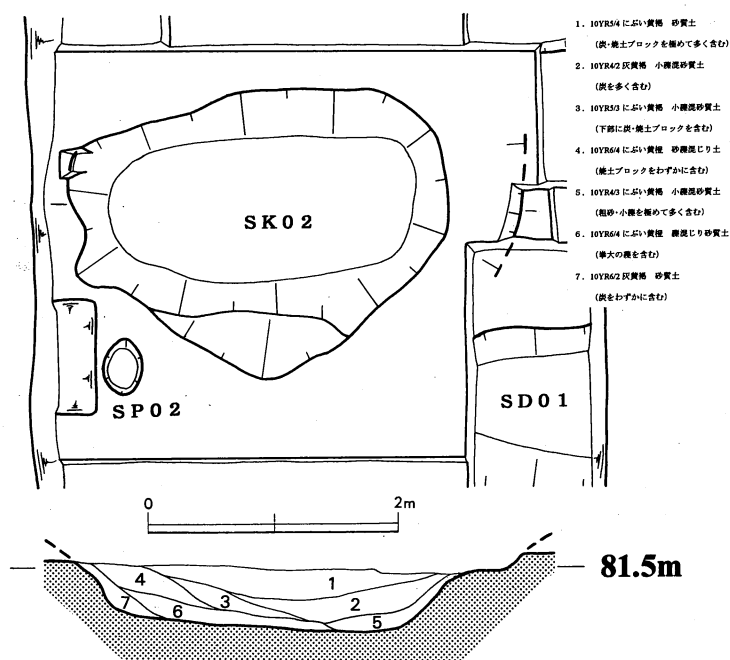


図4 土坑SK-02 平面・土層図 (S=1/60)

次に、時期が下る第III層上面検出の遺構として土坑SK02、小穴SP02、井戸SE01等がある。

土坑SK02は検出時で東西2.3m、南北3.0mの長円形の平面形を呈し、深さは0.5m弱を測る。埋土は、にぶい黄褐～灰黄褐色の炭・焼土塊を極めて多く含む砂礫混じり土を主体とし、多量の土師質皿、炮烙、土管や伊万里、唐津等の肥前系および産地の特定不可能な陶磁器類、瓦類、煙管や針金等の金属製品が出土している。出土状況については、土坑中央に落ち込むよ

うに100枚以上の灯明皿としての使用痕跡が残る土師質皿がレンズ状に堆積し、これ以下では完形、半完形の陶磁器碗や陶器壺等を正置させた状態、あるいは乱雑に投棄された状態とが混在しつつ廃棄土坑としての在り方を示していた。土器群全体としては若干量の17世紀代に帰属時期をもつものを含みつつも、18世紀中葉頃の一群で大半が占められるものであった。こうした状況から多量の土師質皿を祭祀具として用いた廃棄土坑における祭祀行為が窺い知れるものである。

井戸 SE01 は検出時に瓦溜まり SX01 の西側周縁に切り込まれた重複関係を示すことを確認している。従って第Ⅱ層整地土および瓦溜まり SX01 に先行するものと認定できよう。調査区南辺の深掘りで部分的掘削をおこなったため完掘していないが、検出時で径約3.0mの不整円形の平面形を呈し、深さは約1.0mであった。埋土は上部が炭・焼土塊を多量に含む黄褐色砂混じり粘質土、下部が灰黄褐色砂礫混じり砂質土となっている。埋土の状況よりおそらく人為的な埋め立てにより機能を停止したものと考えられる。遺物は全く出土しておらず、帰属時期については前記の重複関係から考えねばならない。

土坑 SK01 は調査区東南隅でその一角を検出している。全体の規模については不明瞭であるが平面的には東西0.8m、南北0.9m、深さは0.3mであった。埋土はにぶい黄褐色粗砂混じり砂質土で、少量の陶磁器片と多量の近世瓦片が含まれていた。出土状況より廃棄土坑と考えられよう。

瓦溜まり SX01 は調査区東側の領域を多く占める皿状の断面形をもつ廃棄土坑である。屋根瓦や道具瓦等各種の近世瓦片を多量に廃棄しており、その数量はコンテナ約20箱に及ぶ。本来的には第Ⅱ層整地土との重複関係を考慮した前後関係を確認すべきであったが、調査時に明確な区分を見出すことができず瓦類の分布が濃密な部分について当該遺構として認識したものである。つまり、瓦類の取り上げと埋土の掘削を進める過程で東側肩部と中央部円形落ち込みを確認するに至った経過があり、それらを総合して次のような変遷過程が想定される。この瓦溜まりは元来径5mの井戸として機能していたが中央部の井筒相当部分を人為的に埋め、その機能を終えたところの落ち込みに後世の遺物廃棄がされたものと理解できるが、第Ⅱ層整地土との時間差についてはさほど隔たりがなかったのであろう。こうした想定は陶磁器類等の遺物の年代観の推移からも裏付けられよう。なお、さらに当該遺構の下面において中世の溝 SD01 と平行する幅約4.0mの SX01 下層の溝状落ち込みを検出しており、明らかに時間的に先行する遺構と認められる。検出時の深さは0.2～0.4mを測り、南半では東側縁にのみ幅約1.3m溝幅となり、底面は南へ傾斜していた。遺物はほとんど出土しなかったため時期は特定できないが、おそらく近世前半の範疇に収まるものと理解しておきたい。

他に小穴 SP01・SP02 の2基が検出されている。小穴 SP01 は瓦溜まり SX01 の底面直上で検出された径0.25m、深さ0.2mの柱穴である。1基のみの遺存であったが、おそらく瓦溜まり SX01 の前身と思われる井戸に付随する構築物の一角を担うものであったと考えられる。小穴 SP02 は土坑 SK02 の北西に近接する。検出時より近世の平瓦片と小型の陶製湯呑茶碗が出土している。規模は径0.4m、深さ0.2mを測る。出土遺物より近世末期頃の時期が想定されるため、上位層よりの掘り込みであったことが考えられる。

3. 出土遺物

中世遺構出土遺物 [溝 SD01出土土器類 (図5-1~13)]

溝 SD01 からは土師質皿、土師質羽釜、瓦器皿、瓦器椀等の中世土器類の破片が出土している。遺構の掘削が調査の都合上部分的であったため、出土量はコンテナ1箱程度と少ない。

1は「て」の字状口縁の土師質皿である。出土土器の中で最も古く位置付けられるもので、12世紀前後の時期が考えられる。この1点を除き2~4の土師質皿はほぼ13世紀後半代の帰属が考えられるもので占められる。土師質羽釜はともに口縁端が内側に屈曲する形態のものであるが、5・6のように内上方へ折り返して上端を強くナデ調整するものと7のように端部を外側に折り返し丸く収めたものの両者が混在する。いずれも13世紀後半~14世紀前後の時期に帰属が求められる。8・9の瓦器皿はいずれも内面見込みに平行線状の暗文が施され、12世紀後半~13世紀頃までの年代観が与えられるものである。次に10~13の瓦器椀では、明瞭な高台と見込みの平行線状暗文、外面底部付近にまで及ぶ丁寧な暗文施文が見られる11が12世紀後半頃の帰属時期を示して古く、これ以外の10・12・13の瓦器椀は、多少の形態差はあるものの見込みの渦巻き状暗文が盛行し、高台の退化が進む13世紀代に収まる一群である。

検出遺構の項でも触れたが、出土遺構である溝 SD01 には掘り返しによる重複関係が認められたため、これら出土土器類の時間幅が12世紀前後~14世紀代となることにも何ら疑問は生じない。おそらく、この間に掘り割り状の遺構が緩やかな変化を見せつつ維持されていたのであろう。

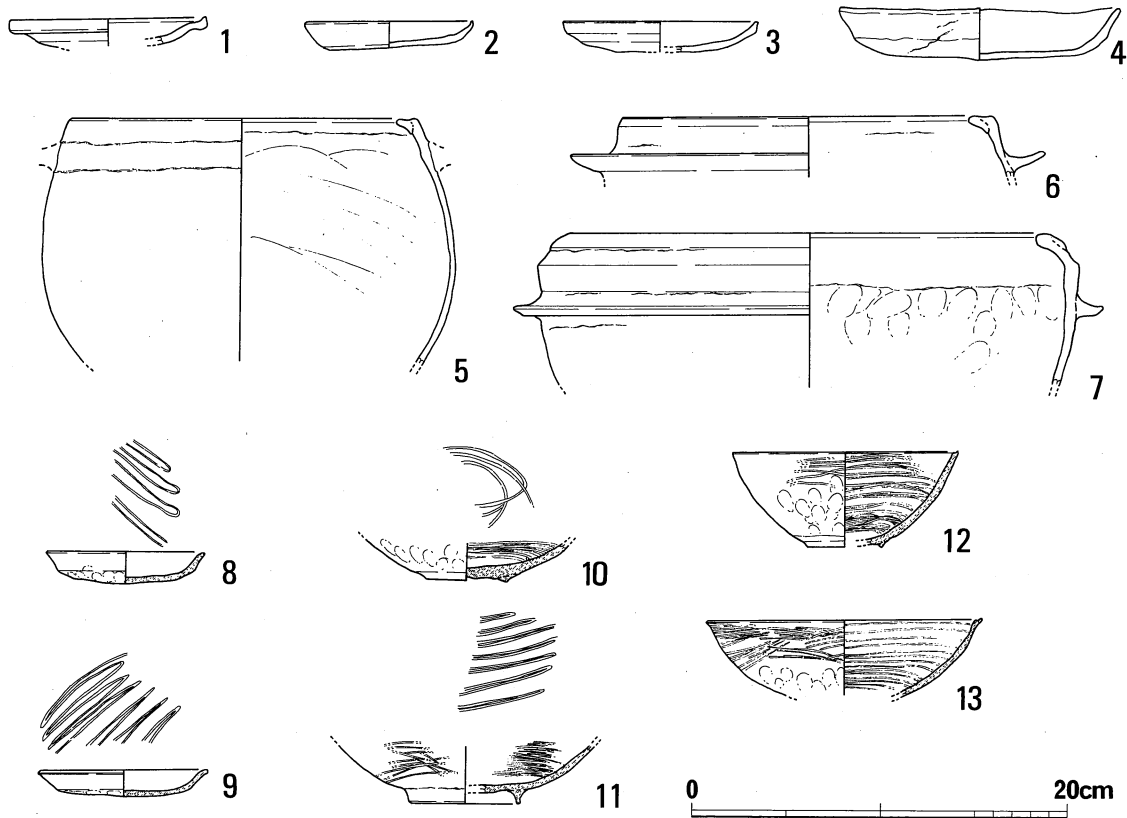


図5 出土遺物実測図1 (S=1/4)

近世遺構出土遺物 1 [土坑 SK02出土遺物 (図 6 - 14~33・図 7 - 34~53)]

土坑 SK02では、埋土上部より多量の完形の土師質灯明皿、下部に雑器類を主体とする陶磁器類、瓦片、金属製品等の大量投棄が認められ、コンテナ約15箱の総量で出土している。それらのうちの一部であるが、ここでは図示したものを中心にその組成について概観しておく。

土師質土器類 (14~29)

土師質皿は完形品で極めて多量に出土している。14・15のような胎土がやや粗く橙色を呈した径7.0cm程の小型品と16~26のように精良な胎土を用いた明るい黄橙色の径10.0~12.0cmのやや大型品との両者がある。数量的には小型品は希少であり、灯明皿としての使用痕跡は認められないのに対して、大多数を占めるやや大型品には著しく油煙の付着が認められている。

26はロクロ成形による土師質皿である。手づくねの皿に比べて深く、全体としての出土量は図示したものと他に1点が出土したのみである。明橙色を呈し精良な胎土で作られている。また、底部には焼成時の黒班が見られる。

27・28は土師質炮烙である。口縁が直口もしくは外反気味に長く延び、端部を短く外側へ屈曲する形態をもつ土鍋型の調理具である。田原本町八尾周辺で製作されたものと考えられている。

29は土師質土管である。裾部との接点となる上端口縁部が単純に「く」の字状をなす形状を呈するものである。裾部はおそらく直口した口縁となるものであろう。

施釉陶器類 (30・31)

30は無頸小壺である。内外面に黄茶褐色と褐色の釉を施し、底部は無釉で糸切底である。31は三耳壺である。外面および内面側の口縁端に茶褐色の釉を施す。出土時には土坑埋土中に正置した状態で出土しており、底部を欠くもののほぼ完形を保っていた。埋土中にも底部片は見当たらず、意図的な打ち欠きによるものとも考えられよう。これらの施釉陶器はいずれも産地については不明である。

肥前系陶磁器類 (32~53)

32・33・36は唐津産の陶器である。32の碗はうすい黄茶色の釉を高台付近まで施す。器表面の貫入が目立ち、高台下面付近に砂目積み痕跡が見られる。33は内面に刷毛目塗りの装飾が施される皿である。灰茶色と白色の釉が施され、内面の見込みには環状に砂目積み痕跡が残る。36は内面に印刻による装飾が見られる皿である。おそらく型押し施文と考えられるもので、施釉についてもやや雑な作りが窺える。茶白色の釉が認められるが、これは火を受けて被熱変化したものであると思われる。33・36ともに三島手の皿である。

34・35はともに白磁碗である。径の小さな高台を特徴とする。17世紀後半以降の生産時期が考えられるもので、おそらく肥前産であろう。

37は仏飯器である。口縁を欠くが、外面には草花文様の染付けが見られる。38は印判手の小杯である。39は鬘盤である。器表面の貫入が目立ちわずかに文様が認められる。40は口縁端に口鏤の見られる手塩皿である。見込みに菖蒲の花模様、外面には草模様が描かれている。

41~51は染め付け碗である。41は外面にコンニャク印判による染付けが見られる。42は多条の圏線の特徴とする。器表面には貫入が顕著に見られる。43~46には草花文様が描かれる。45・46

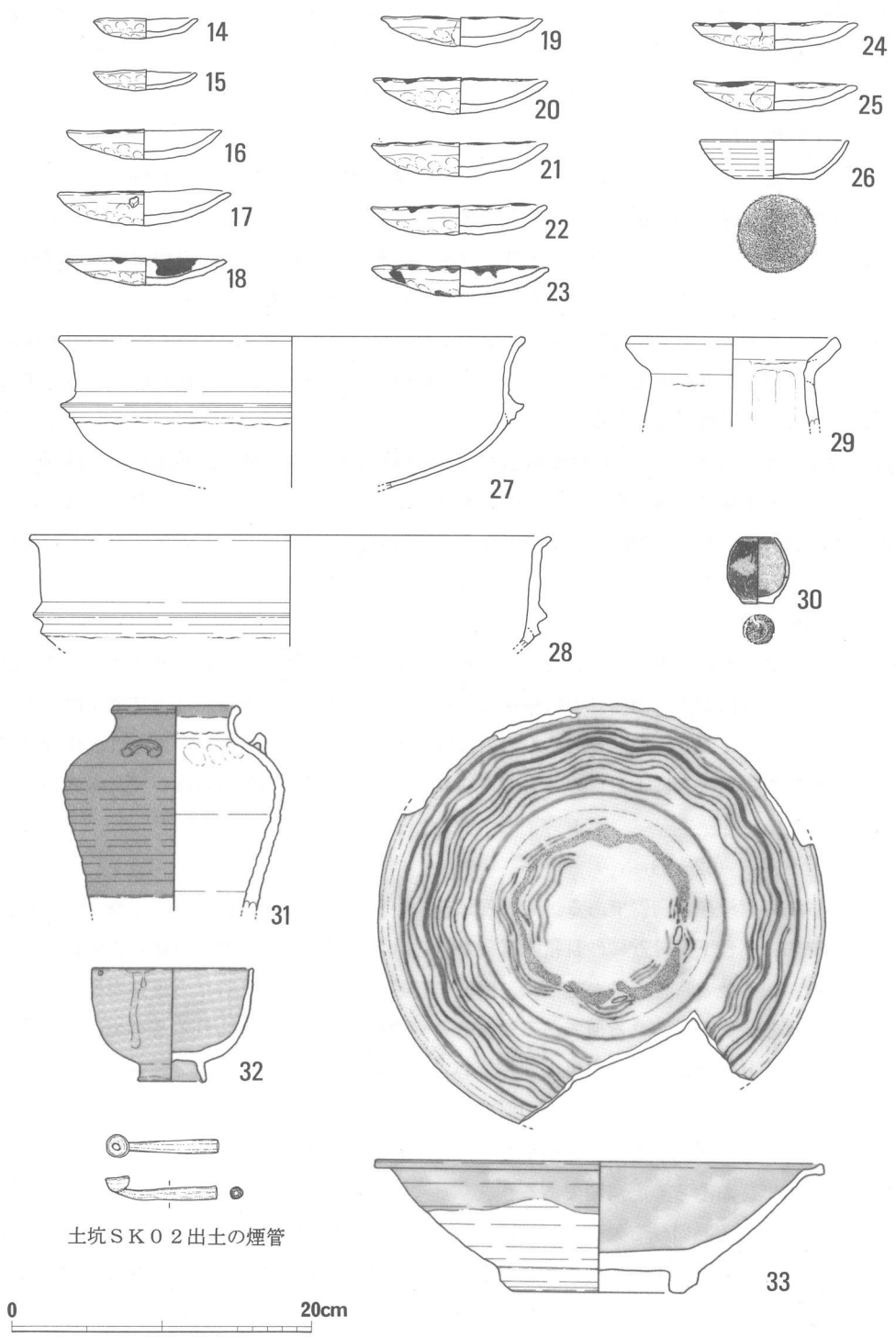


図6 出土遺物実測図2 (S=1/4)



图7 出土遺物実測図3 (S=1/4)

には内面見込みに蛇ノ目釉ハギの手法が認められる。47～51は高台内に銘が見られる染め付け碗である。47は「大明成化年製」の銘をもつ。外面には斜め襷文様帯と草花文様が描かれる。48は土坑埋土中で1点のみ出土している色絵染付け碗である。外面および内面見込みに赤、緑色の顔料を用いた微細な色絵が装飾として施されている。高台内には一部を欠くが「富貴長春」の銘が見られる。49・50はともに高台内に「福」の銘が見られる。これらはその書体から渦福と呼ばれ18世紀代に流行するものである。49は外面に竹花文様、50には斜め襷文様帯と円の中を直線と曲線で充填した模様が付される。51には外面に梅花文様、高台内面に「富貴長春」の銘が見られる。52の皿には内面の縁まわりに梅花文様、見込みには五弁花文のコンニャク印判が付される。53は見込みに昇り龍を描き、外面口縁に曼華文を巡らす大皿である。高台内面には「大明年製」の銘が見られる。これら37～53の陶磁器はすべて伊万里産であると思われる。

煙管（図6 - 左下）

煙管は雁首部分のみ残るものが1点出土している。材質は真鍮である。火皿部分の口径1.5cmを測り、長さは7.4cmである。ラウ部分は残っていないが、末端小口では内側に竹筒の木質が遺存する。この部分の最大径は0.9cmである。

土坑 SK02 出土資料は、全体的に肥前系陶磁器の年代観より17世紀後半頃のものを若干含みつつも、ほぼ18世紀前半代のもので占められている。従って、廃棄に至った頃までの時間差を考慮してもほぼ18世紀後葉を遡らない時期の一括資料として評価される土器群であると言える。

近世遺構出土遺物2 [第Ⅱ層・瓦溜まり SX01・土坑 SK01出土遺物（図8・9 - 54～81）]

前項の土坑 SK02 出土資料よりも層位的な重複関係、遺物組成等から明らかに後出する土器群である。上記の遺構と遺物包含層からは18世紀後半・末以降より19世紀後葉まで、江戸後半から幕末、明治初頭頃の雑器類が多量の瓦片とともに出土している。総出土量はコンテナ約50箱にもおよび、ここでそのすべての内容について示すことは困難な状況にある。そのため本概報では特徴的な雑器類のみ図示し、土器群の概観のみに留めておきたい。

54は土師質炮烙である。短く直立する口縁をもつ皿型の形態を示す。55は瓦質土器である。環状の平面形を呈し、外側の周縁に櫛状工具による施文が見られる。おそらく、調理施設である竈と土鍋、鉄鍋等の煮沸具との間に置かれる補助器具として使用されたものと思われる。56の陶器摺り鉢は堺の湊焼系の特徴をもつものであり、赤褐色の色調を呈する硬質な焼成のものである。57・58はともに瓦質土器の鉢である。いずれも外面には丁寧な横方向のミガキを施し、口縁部付近には複数の円孔が穿たれている。57は外面の燻し焼きによる炭素吸着が顕著であるが、58には高台が付き、外面の燻し焼はされていない。部分形状と仕上げのわずかな違いがあるが使用目的の差によるものかも知れない。59は黄白色の釉が施される施釉陶器大型盤である。見込みには粗砂を使用した砂目積みに類似する釜詰め手法が認められる。明治以降のものと考えられるが産地については不明である。60は施釉陶器壺である。茶色の釉を地として部分的に黒褐色の釉が施されている。貯蔵用壺であるが産地は不明である。61は焼塩壺の容器の蓋である。内面には布目圧痕が見られる。おそらく型作りによる生産に係るものであろう。62は施釉陶器行平鍋の蓋である。外面に緑色釉を施す。63～65も同じく行平鍋である。それぞれに把手部分に特徴的な屋号が見ら

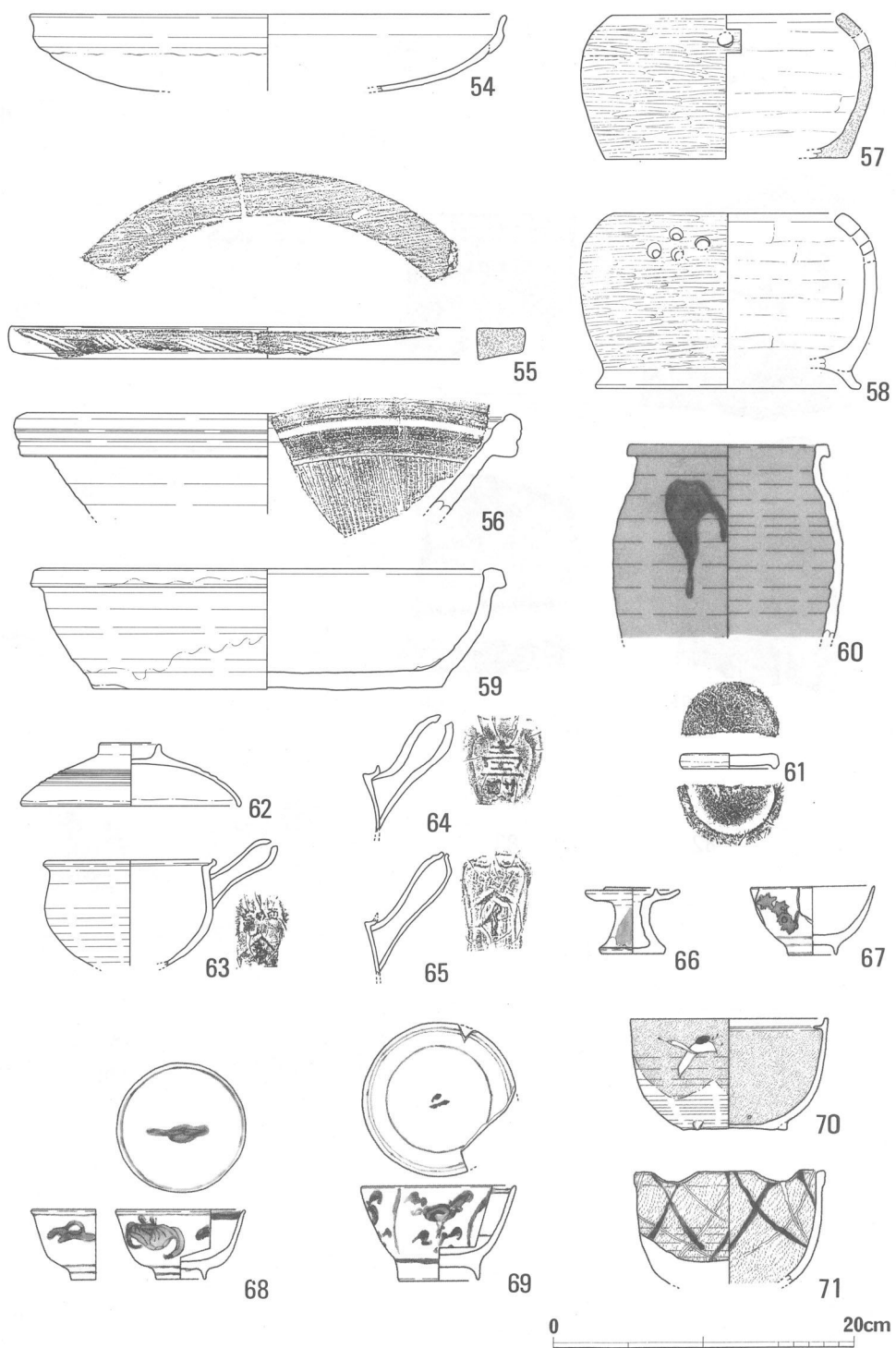


图8 出土遺物実測図4 (S=1/4)

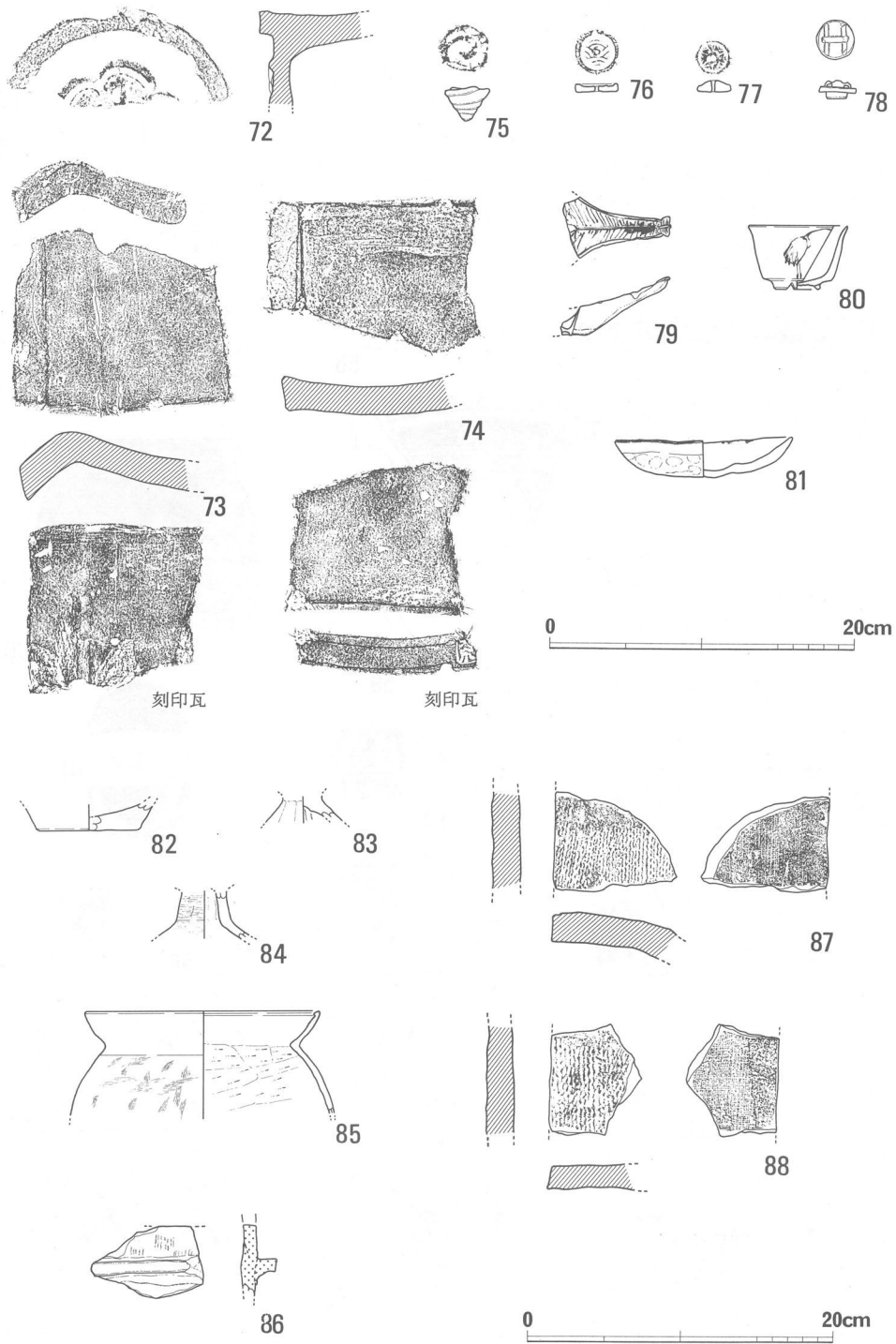


图9 出土遺物実測図5 (S=1/4)

れる。いずれもこの部分については型作りである。63は注口部を欠くが口縁形状は他の2点とほぼ同じである。緑色釉が施され、把手には「西ノ竈 ㊦ (解説不明)」と付される。64は淡緑白色の施釉で把手には「壽」とある。65は外面に鉄泥を塗布したもので把手に「𠄎」と付されるものである。同様の製品では他にも鶴や亀の絵を把手に付したものが出土している。66は施釉陶器のひょうそく(ろうそく立て)である。灰白色を呈し部分的に煤の付着が見られる。伊賀・信楽系陶器とおもわれる。図示していないが類似した色調、焼成の陶製灯明皿も多く出土している。67は外面にコンニャク印判により染め付けされる碗である。焼成時のひび割れが見られる粗悪品であるが、使用後も火を受け被熱による釉の白濁が見られる。おそらく伊万里産であろう。68はこうもり様の染付け文様を外面と内面見込みに描いた碗である。焼き継ぎ痕跡が見られる完形品である。産地については肥前、瀬戸のいずれかであろう。69は広東碗の形態をもつ染付け碗である。外面に草花文様を描き、見込みに文様らしきものが見られる。70は京焼風施釉陶器の蓋付き鉢形容器である。焼成はやや軟質で木目細かい胎土をもつ。内外面に透明釉が施され、色調はにぶい黄白色を呈する。外面に鶴の絵が付され、内面には針支え様の窯道具痕跡が見られる。産地は不明である。71は古九谷の向付である。灰色がかったにぶい黄茶色の色調を呈し、表面の凹凸が著しい容器である。内外面に鉄泥と白釉による斜め格子文様が施される。平面形は隅丸六角形になると考えられる。口縁は端部が外面側にやや肥厚し、部分的に半円形の削り込みが見られる。

近世瓦類は各種多様なものが大量に出土している。ここでは特徴的な軒丸瓦と平瓦についてのみ記す。72は織田家の家紋である木瓜文の軒丸瓦である。花卉の形態に省略化が進んだ段階のものである。73・74の平瓦は端面に「宗」、「大宗」の刻印文字をもつ。瓦類では他に巴文の軒丸瓦や蔦文様の軒平瓦、行基葺き軒瓦、道具瓦等が出土している。

75～78は小型の土製玩具類である。75はバイ貝を模した素焼き土製のベー独楽である。上面には渦巻き模様が見られる。76は明和年間(1764～1772年)に製作された貨幣「寛永通宝」の裏面にある波目文様を模した独楽である。表面には製作時に使用した雲母の粉末によるハナレ砂痕跡を見ることができる。胎土は精良なものを用いて作られている。77は上面に星形の線刻文様を付す小型の独楽である。76・77にはともに中央に棒状の部品を挿入するための小穴が穿たれている。78は施釉陶器の小型土釜の蓋である。上半および側面にかけて茶褐色の釉が施されている。ままと道具と考えられる。75～78はいずれも型作りによる製作品である。

なお、54～56・69は瓦溜まりSX01、57～68・70～78が第Ⅱ層よりそれぞれ出土したものである。

79は土坑SK01より出土した唯一の陶磁器片である。多量の近世瓦片とともに出土している。持ち手の先端に立体的な蝶の装飾を付した散り蓮華であり、内面側にも青色の染付け文様を施すが、外面は透明釉、匙底面は無釉薬である。おそらく伊万里産と考えられ、江戸末期・幕末頃のものであろう。

80は小穴SP02の施釉陶器の小型染付け湯呑茶碗である。高台に3箇所三角形の切り込みが見られ、外面には鉄絵による鶴の文様が描かれている。青みがかった明灰色の色調を呈し、焼成は堅緻である。19世紀代、幕末頃の帰属時期が考えられる。大和郡山の赤膚焼の産であろう。

81は**落ち込み SO01** 埋土上部より出土した完形の土師質皿である。口縁部の周囲にはわずかに油煙の付着が見られ、灯明皿として使用されていたことがわかる。**落ち込み SO01** は、層位的には17世紀前半頃までの堆積により埋没することからこの土師質皿が下限の時期を示している。

中・近世以前の出土遺物 [中・近世遺構混入遺物 (図9-82~88)]

第6次調査では、中・近世の遺構を確認しているがそれらの埋土中には中世以前の土器類も混入遺物として含まれていた。中世以降の土地の改変により失われた遺構、遺物包含層がかつて存在したことを示す資料であるためここで提示しておく。

82の小片は内面に板ナデ痕の残る壺底部である。83は台付き鉢あるいは甕の脚部片である。内面に若干のシボリ痕が残り、外面はタテ方向のヘラナデで仕上げる。82・83はともに弥生中期末～後期の範疇に収まる土器と思われるが、小片であるため詳細な帰属時期を求めることができない。84は全体に器面の摩滅が顕著に認められる小型低脚高杯の脚部片である。淡赤褐色の精良な胎土を使用し、外面には細かいヨコ方向のミガキ、脚柱部内面にヘラナデ痕が見られる。形態および調整から弥生後期末～古墳前期初頭・庄内式後半～末の帰属であることがわかる。85は定型化した布留式の甕である。器面の摩滅が著しいが、外面にはわずかながらもハケ調整が看取できる。古墳前期の帰属時期が考えられる。86は円筒埴輪片である。断面矩形の突帯が付き上端には三角形あるいは方形の透かし孔の一辺となる直線的な面が看取できる。外面には縦方向のハケと横方向のナデが施される。円筒埴輪としては古式の部類であり、前期古墳に樹立されていたものと思われる。図示したもの以外にも同様な特徴の埴輪片が出土しており、近傍に当該期の埴輪を保有する古墳の所在した時期があったのであろう。これまでも第2次調査地において埴輪片の出土が報告されているが、今回の調査で出土した埴輪が最も時期の遡る出土例となる。87・88はともに平瓦片である。凸面に縄目叩き、凹面に布目圧痕が残り、焼成良好で堅緻な淡灰色の色調を呈する瓦片である。奈良～平安初頭頃のものと思われる。同時期の瓦類は今回の調査地より南に250mの地点で平成8年度に実施した柳本遺跡群アンド山地点の調査の際にも13世紀前後の時期に廃棄された瓦溜まりより出土しており、それも含めて中世以前に存在が想定される大寺院「柳本廃寺」との関連が窺える資料となるものである。

それぞれの出土地点は、82~84・86~88が**土坑 SK02** 埋土、85が**溝 SD01** 埋土である。

Ⅲ. まとめ

今回の調査では、柳本藩邸跡に関わる武家屋敷等の明確な遺構を見出すことはできなかった。これは、第6次調査地が柳本藩邸遺跡の北東隅の居宅地のはずれに該当したところであったためかと思われる。なお、調査では18世紀中葉前後の土坑や19世紀代の遺物廃棄跡と整地土層を検出したほかには近世の明確な遺構は見当たらなかった。この状況は嘉永7年の「柳本陣屋絵図」の記載状況に近いものと確認できよう。また、当該調査地の第Ⅲ層上面の炭・焼土混じり整地土については前記の土坑 SK02埋没後の上位堆積土層であり、その上部に19世紀以降の遺物を包含する第Ⅱ層整地土、瓦溜まり SX01が重複する層位関係より文政13年(1836年)の大火後の整地に係る土層であるかもしれない。従って、陣屋絵図にもある調査地西端の現状の石垣は、天保年間の

復興に伴って築かれたものと考えられよう。

次に、近世以前の溝等の中世遺構を調査で確認している点について、近接する黒塚東地点（1981年奈良県立橿原考古学研究所調査地）の成果と併せて考えても中世土豪の居館あるいは城館と考えられるものである。

時期については12～14世紀であり、黒塚東地点の溝出土土器群と時期的には整合性が認められる。第6次調査地では後出する同方向の溝もあり、これらの地割を近世初頭頃まで踏襲していたことが判っている。

いずれにせよ、今後もこの周辺の調査を待って中世～近世・近代に至る土地利用の変遷についての意義付けを検討せねばならないであろう。



図10 黒塚東地点と今回の調査地 (S=1/800)

参考文献

秋永政孝1940 『柳本郷土史論』

今尾文昭ほか1982 「黒塚東遺跡発掘調査概報」奈良県遺跡調査概報1981年度（第二分冊）

奈良県立橿原考古学研究所編

泉武ほか1985 「1 柳本藩邸跡」天理市埋蔵文化財調査概報昭和58・59年度 天理市教育委員会

泉武1986 「1 柳本藩邸跡（第2次）」天理市埋蔵文化財調査概報昭和60年度 天理市教育委員会

泉武1988 「1 柳本藩邸跡（第3次）」天理市埋蔵文化財調査概報昭和61・62年度 天理市教育委員会

松本洋明1992 「1 柳本藩邸跡（第4次）」天理市埋蔵文化財調査概報昭和63・平成元年度

天理市教育委員会

松本洋明1993 「柳本藩邸遺跡（第5次）」天理市埋蔵文化財調査概報平成2・3年度 天理市教育委員会

西乗鞍古墳の調査

I. はじめに

1. 調査の契機と経過

西乗鞍古墳では、平成11年6月27日の豪雨により都市計画道路木堂萱生線に沿った西側法面が2ヶ所被害を受けた。この場所は古墳本体が作られている基壇状部分に該当し、古墳に伴う施設であると考えられてきた。そして、上面は現在広い平坦面を作り古墳全体が公園として利用されている。

今回の法面の崩壊は広範囲におよび、流出土砂を取り除く過程で平坦面から1～2mは盛土状の積み上げ土が観察され、これより下は地山土であることが判明した。また流出土から埴輪片が採集されたことから、この基壇は古墳に伴う施設であることが判断された。

以上のような経過により、崩壊部分を文化財として取扱い、これの修復と崩壊断面で検出された盛土がどのような施設として古墳に付属しているのか調査する必要性が生じた。

墳丘裾部西側に広がる平坦面の調査は、法面崩壊部分に隣接して東西方向に2ヶ所設定し、同時に法面の修復工事を併行して実施した。総調査面積は法面崩壊部分、調査区あわせて約200㎡である。

2. 西乗鞍古墳の概要

当古墳は東に隣接する東乗鞍古墳と、西に隣接する小墓古墳、焼戸山古墳とともに杣ノ内古墳群を形成している。墳丘は後円部を北に向けた前方後円墳で、全長約118m、後円部径約66m、同高さ16mを測る。墳丘裾部の西側には東西約20～30m、南北約130mの平坦面が広がり、西側を通る道路面とは5m以上の高さでこれまで古墳に伴う基壇状の施設と考えられてきた。また、平坦面についても古墳裾部に向かって東へわずかに傾斜し、濠跡ではないかと考えられてきた。

1981年には奈良県立橿原考古学研究所の南側隣接地の調査により、南・東側に外濠が検出され二重の周濠があることが判明した。

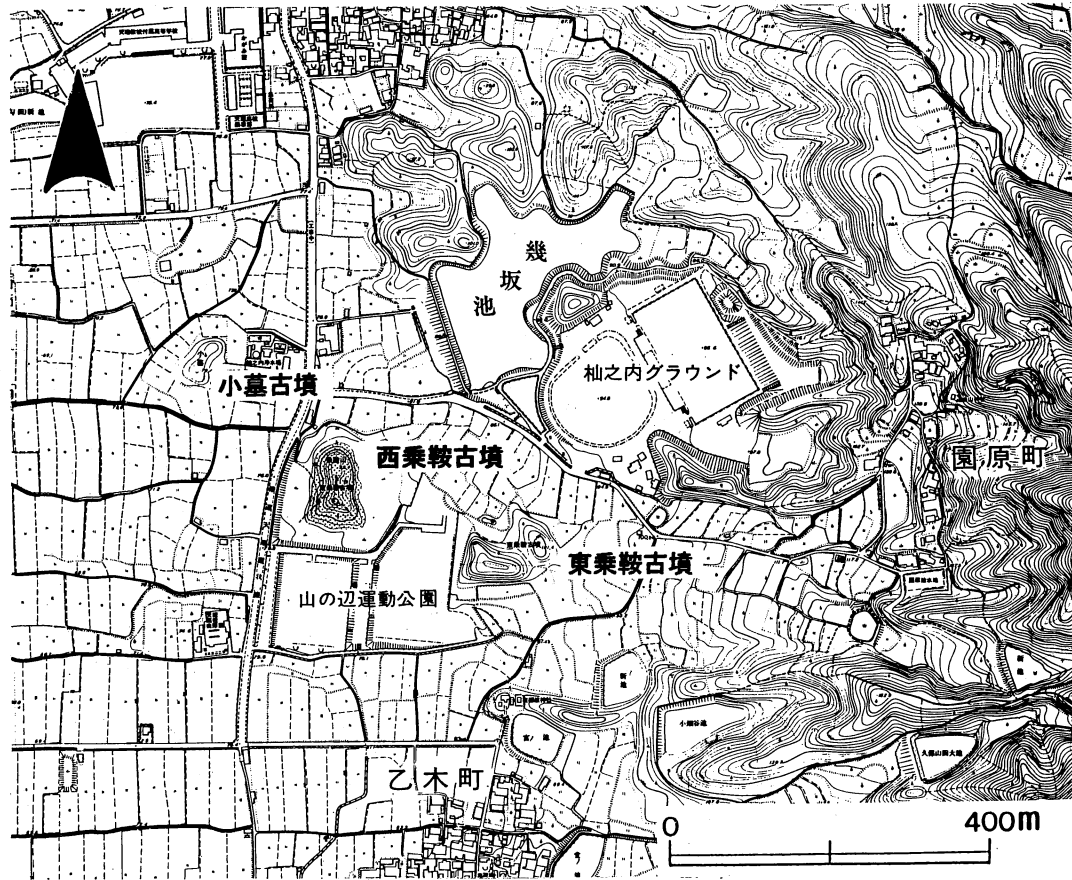
しかし、墳丘部の埋葬主体は明らかにされていない。これまでの出土遺物は墳丘から採集された須恵器、円筒埴輪、朝顔形埴輪などがあり、古墳時代後期初頭（6世紀初頭頃）と推定されている。

3. 基壇状施設における法面崩壊の状況

平成11年6月27日の集中豪雨は、奈良県下に広く被害を与えたが、西乗鞍古墳においても基壇状施設の西側法面が2ヶ所崩壊し、土砂が流失するという被害を受けた。

北側法面では幅15m、高さ5m、南側では幅6.7m、高さ5mの範囲が崩壊した。流失した土砂は水路と一部道路面まであふれたため、翌日から緊急の撤去作業が開始された。

しかし、土砂の撤去作業にともなって埴輪片なども採集されることとなり、文化財調査の必要性が生じ、奈良県教育委員会や奈良土木事務所など関係機関と協議がもたれた。



西乗鞍古墳とその周辺

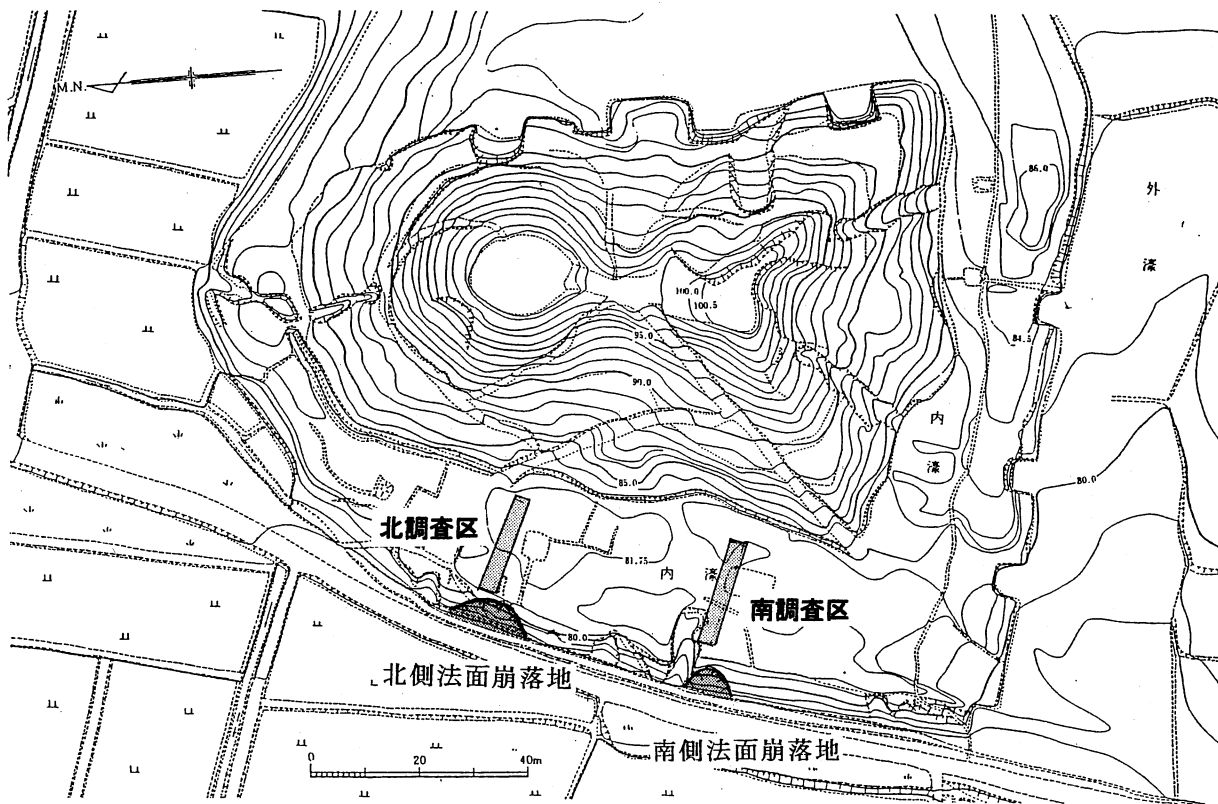


図11 西乗鞍古墳および調査地点位置図

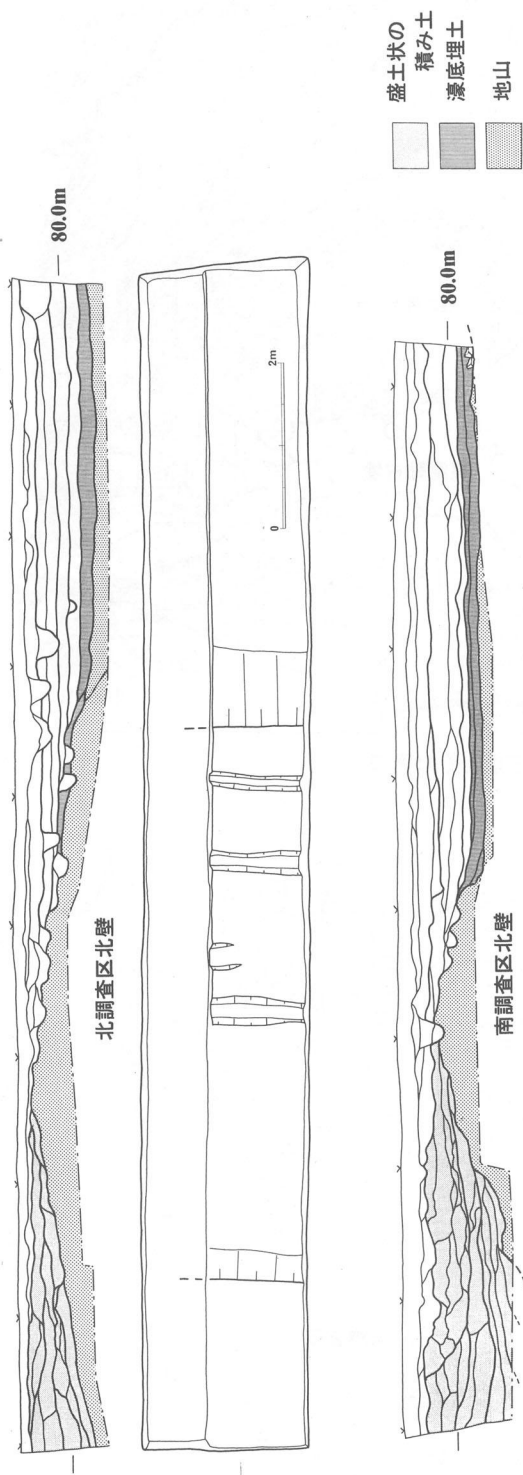


図12 各調査区の土層図・平面図 (S=1/80)

II. 調査の概要

1. 崩壊法面の調査

崩壊法面については、土砂の撤去後改めて法面をきれいにして観察した。

北法面では、表土から90cmほどは攪乱土が堆積するものの、これから下80cmは3層の盛土状の積み土が確認され、1.8mでは黄褐色砂礫土の地山層が確認された。南法面では表土から2mで地山層が確認され、その間は整地土と盛土状の積み土が北法面と同じように確認された。

また、流失土から埴輪片が出土したため、これがどの層位から出土したものであるか確認したが、北法面では攪乱土内で破片が見られた。

2. 北調査区の調査

北調査区は墳丘への登り口から南へ10mのところを設定した。調査区は東西長18m、幅2.5mである。調査区の西端は平坦面肩部から3m内側に設定した。

調査の結果、調査区西端から5.3mまでは、整地土を除くと直ちに盛土状の積み土が検出された。これより東側は徐々に東へ深くなり、濠の存在が確認された東端では深さ1.3mあり、濠幅は古墳裾まで約16mである。濠内の堆積土層は上面から4層確認され、3層面まで素掘溝が検出された。各面は全体的には灰褐色粘質土の水田耕作に伴うような土層である。出土遺物は4層まで瓦器片が出土する。埴輪は各層から出土するが、濠底では破片はやや大きくなるものの大量には出土していない。

西側盛土状積み土の状況は、北側土層面により観察すると、地山面が西にゆくにしたがい徐々に深くなり、調査区西端

では1mである。この間は砂質土が5層に細かく積まれていることが明らかにされた。

3. 南調査区の調査

南調査区は、北調査区から南へ約40mの間隔である。また調査区の西端は平坦面肩から5m内側で設定した。調査区は東西17m、幅2.5mである。ここでは上面で暗渠排水の施設を検出したため最終的には北側の断面による遺構確認に留める方法を取った。この結果、西端から6mの地点を分岐点として、東側は深さ1.3mの濠が確認され、西側では北調査区で確認されたのと同様の盛土状の積み土が確認された。濠内堆積は3層あり東端付近の濠底では、葺石が転落したと考えられる人頭大の礫石と比較的大きな埴輪片が出土した。

西側は地山の急な落ちがあり、西端では1.7m掘り進んだものの地山面は確認されなかった。盛土状の積み土上面と地山面までは、細かいブロック状の砂質土と粘質土のかたまりが入る積み方をしている。従って、北・南調査区では、古墳裾部から幅約15~18mの濠跡が検出され、さらに濠肩の西側では地山を掘り窪めて盛土状の積み土が確認された。

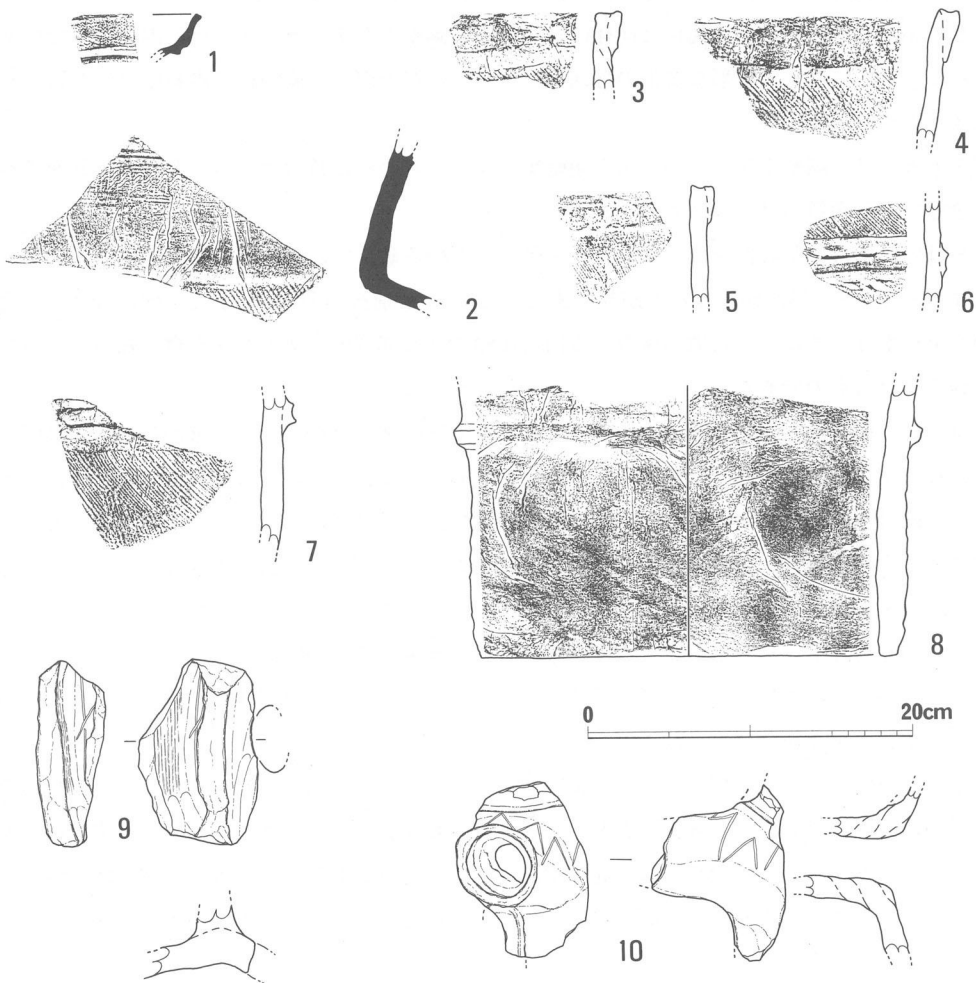


図13 出土遺物実測図1 (S=1/4)

4. 出土遺物

2ヶ所の調査区と法面流失土から出土し遺物は大半が埴輪片であり、コンテナ約10箱分であった。円筒埴輪、朝顔形埴輪、人物や器材の形象埴輪と須恵器片があるが、南調査区東端濠底付近出土の円筒埴輪を除けばほとんどが破片資料で占められている。

1は須恵器甕の口縁部の小片である。外面には櫛描き波状文が櫛歯8～10本を1単位とした原体により施文されている。

2は須恵器大甕の頸部から口縁部にかけて残る破片である。頸部から下位の部分では縦位に平行叩き目が見られ、内面には丁寧な指頭によるナデが施されている。口縁部の外面には沈線や細筋の突帯による区画の内部を櫛歯7条を1単位とする櫛描き波状文で充填する文様帯が1条のみ残存する。

3～8・11～13は円筒埴輪の破片である。

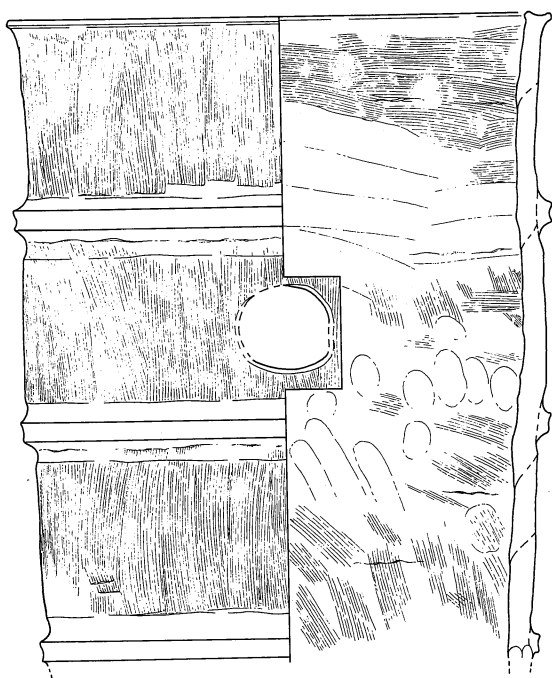
3～5の口縁部の上端外面側に突帯を巡らす円筒埴輪は、いずれも突帯付加以前にタテ、ナナメ方向の1次調整ハケ目のみを施し、内面はナデ調整で仕上げている。

6の小片では、大半の埴輪片と同様に外面は1次調整のタテ・ナナメハケ、内面ナデで仕上げられているが、低く不整形な突帯の付加後に付された左上がりの刺突様の調整圧痕が突帯の直下に認められる。

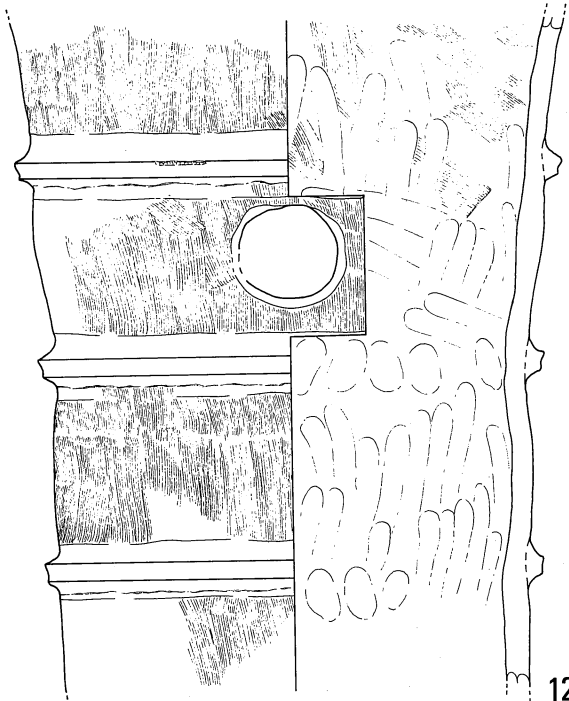
7の破片は、調整手法等は他の出土埴輪類と比べて変わった特徴は見られないが、外面側器面の全面に赤色顔料の付着が認められるものである。

8は円筒埴輪の基底部をなす1段目の突帯までが残る破片である。図示した図面上の拓影では認識しにくい、外面側には左上がりの連続した幅1cm前後の叩き目が残る。内面はナナメ方向のナデ仕上げである。当古墳の保有する円筒埴輪の基底部調整手法の一端を窺い知ることのできる資料となるものである。

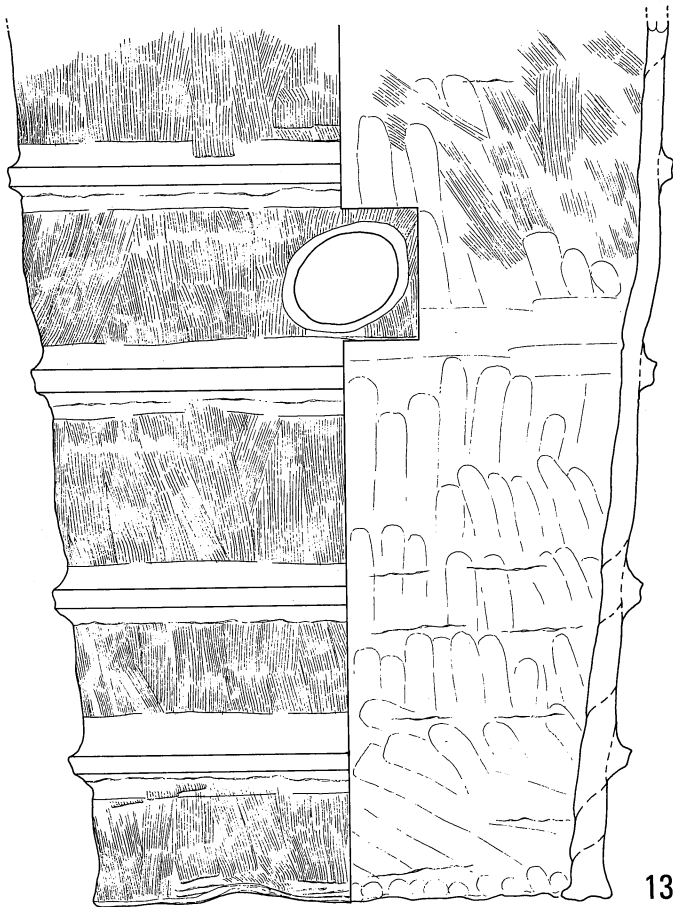
11～13はいずれも全形を窺うことができそうな大型の破片資料である。透かしの円孔に関しては残存部が少ないため断定し難いが、ほぼ対向位置での穿孔であると思われる。11は口縁部から3段目までの突帯が残る直口口縁の円筒埴輪である。外面は基本的にタテ・ナナメ方向の1次調整ハケのみ施される。内面では口縁部にヨコ方向のハケ目、それ以外ではタテ・ナナメ方向のハケ目を施すが、突帯部の裏面を主として指頭圧、指頭ナデ、板ナデ等が部分的に加えられる程度の調整で仕上げられている。12は基底および口縁を欠くため実測図には若干の傾きに関しての不安が残る円筒埴輪である。調整手法についてはこれまでとほぼ同様である。内面側には指頭圧痕、指頭ナデが顕著に見られるが、口縁部側の上位にのみハケ目調整が施される。13は復元実測できた埴輪の中でも大型品の円筒埴輪である。基底部は他の円筒埴輪より低く、1段目の突帯までの間についてもタテ方向を基調としたハケ目調整が施される。基底より1段目突帯の間および1段目と2段目の突帯間がほぼ等間隔であり、上位では等間隔を保つものの突帯間の幅は広くなっている。ここでもやはり内面調整については口縁部に近くなる部分でハケ調整が見られるようになっていく。



11



12



13

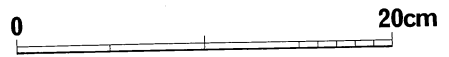


图14 出土遺物実測图 2 (S= 1 / 4)

9・10はいずれも形象埴輪の部分的に残る破片資料である。

9は横断面がラグビーボール形になる埴輪の頂端部に線刻による装飾が施文された鱗状部分を付加するという特徴をもつ破片である。施文が片面のみであることからおそらく石見型等の盾形埴輪の一部であると思われる。10は人物埴輪の肩から腕の付け根部分にかけて残る破片である。人物の首にあたる部分では段差を作りだし襟元を表現しているものと思われる。また、その部分より下方では鋸歯状の線刻により袖部分の装飾を加えている。こうした特徴から巫女形等の人物埴輪であると考えられるものである。

これらの出土埴輪類では焼成面で須恵質と土師質のものが混在して出土している。(青木)

Ⅲ. まとめ

墳丘西側に広がる平坦面は、後世埋め立てられ水田化していた可能性がある。そして、現況面から深さ約1.3m、幅約15mの濠を検出した。濠が墳丘全体をめぐるかどうかは改めて検討が必要であろう。

また、濠の肩部から西側の状況については、肩部から地山面が西へ1m以上掘削され、改めて盛土状の積み土がなされている。従ってこの部分には、本来外堤状の施設が築かれていたと推定される。

当古墳の築造時期は出土した埴輪により6世紀前半頃であろう。

	出土地点・層位	色 調	胎土	焼成	法 量	備 考
1	北区第4層	N6/灰	密・精良	良好		須恵器
2	北区第6層	N8/灰	密・精良	良好		須恵器
3	南区第4層	10YR8/4浅黄橙	密	良好		円筒埴輪
4	北区第5層	7.5YR7/6橙	密	良好		円筒埴輪
5	北区第6層	7.5YR8/6浅黄橙	密	良好		円筒埴輪
6	北区第6層	7.5YR8/6浅黄橙	密	良好		円筒埴輪
7	北区第6層	10YR7/1灰白	密	良好		円筒埴輪 外面に赤彩
8	南区第4層	7.5YR8/6浅黄橙	密	良好	復元底径25.0cm 現存高15.4cm	円筒埴輪 底部約1/2残存
9	北区第5層	10YR8/2灰白	密	良好		形象埴輪
10	北区第6層	10YR8/4浅黄橙	やや密	やや良好		形象埴輪
11	南区東端第6層	7.5YR8/4浅黄橙	密	良好	復元口径28.8cm 現存高34.5cm	円筒埴輪 口縁部約1/2残存
12	南区東端第6層	10YR7/3にぶい橙	密	良好	現存高36.4cm	円筒埴輪 体部約1/2残存 外面に赤彩
13	南区東端第6層	10YR5/1褐灰	密	良好	復元底径23.2cm 現存高46.8cm	円筒埴輪 底部約1/2残存

表 出土遺物観察表



調査前全景(東から)



作業風景



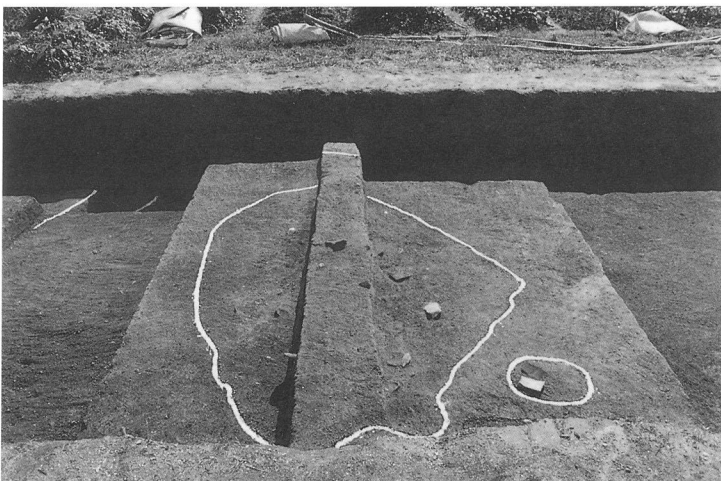
瓦溜まりSX01検出状況
(北東から)



土抗SK01遺物出土状況
(東から)



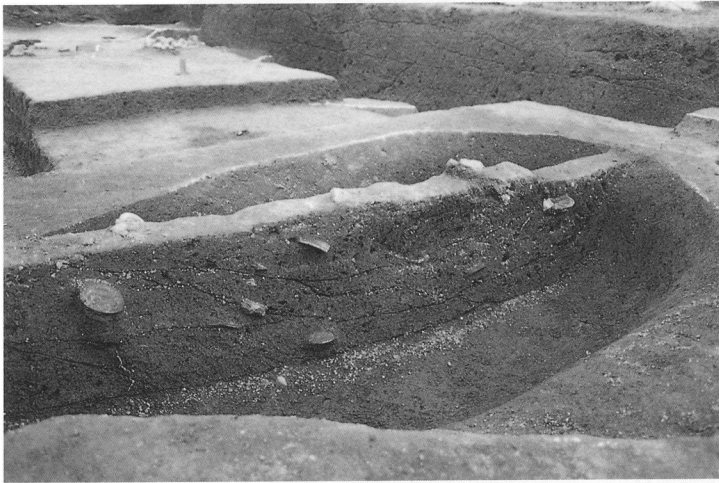
調査区全景 (東から)



土抗SK02検出状況
(北から)



土抗SK02遺物出土状況
(北から)



土抗SK02土層断面
(西から)



調査区西半南壁土層断面
(北東から)



調査地周辺航空写真（東から）



調査区全景垂直写真（写真上が南）



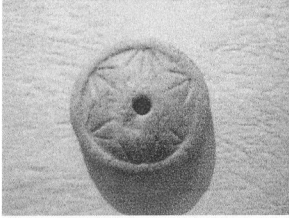
行平鍋の把手 (63)



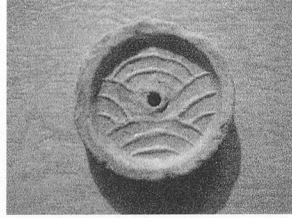
行平鍋の把手 (64)



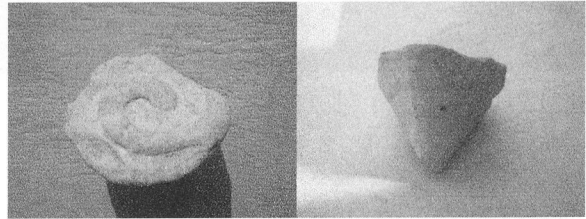
行平鍋の把手 (65)



土製玩具類 独楽 (75)



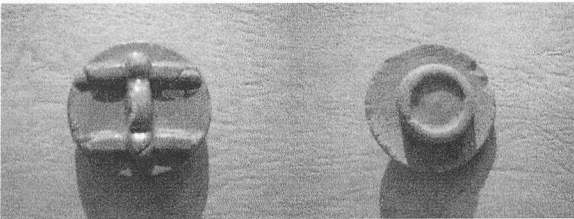
土製玩具類 独楽 (76)



土製玩具類 ベー独楽 (75)

上面

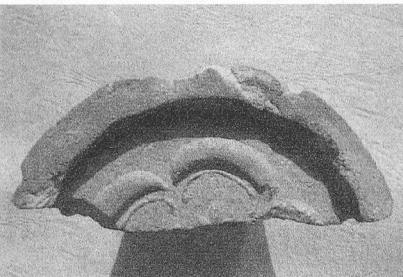
側面



土製玩具類 小型土釜の蓋 (78)

上面

裏面



木瓜文軒丸瓦 (72)



刻印瓦 (74)



刻印瓦 (73)



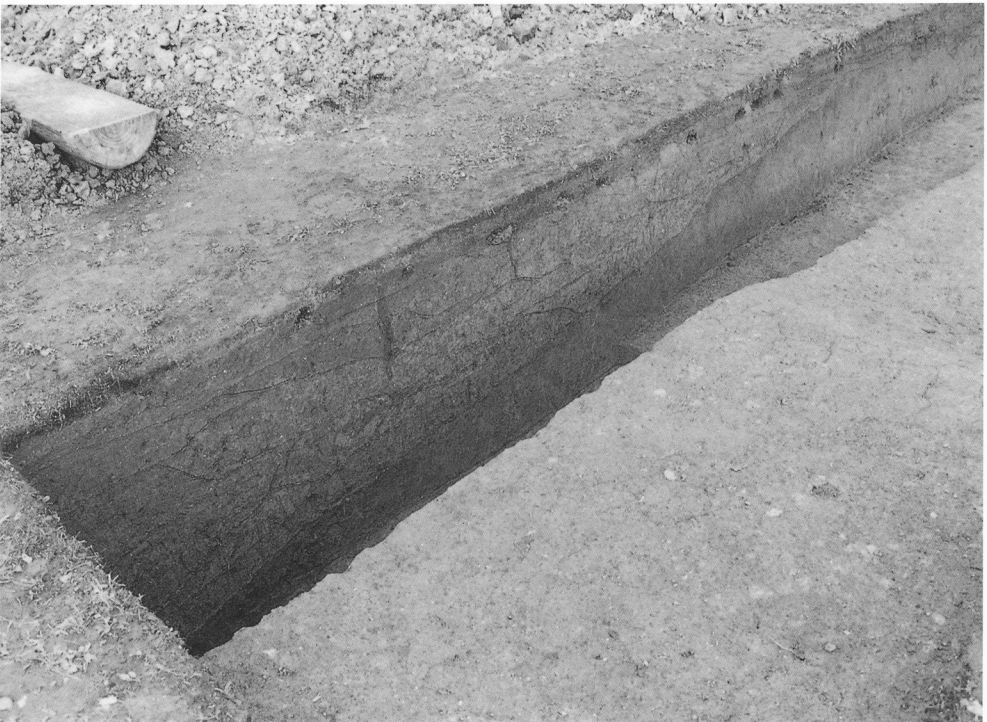
墳丘裾部西側平坦面（北から）



北調査区調査前状況（東から）



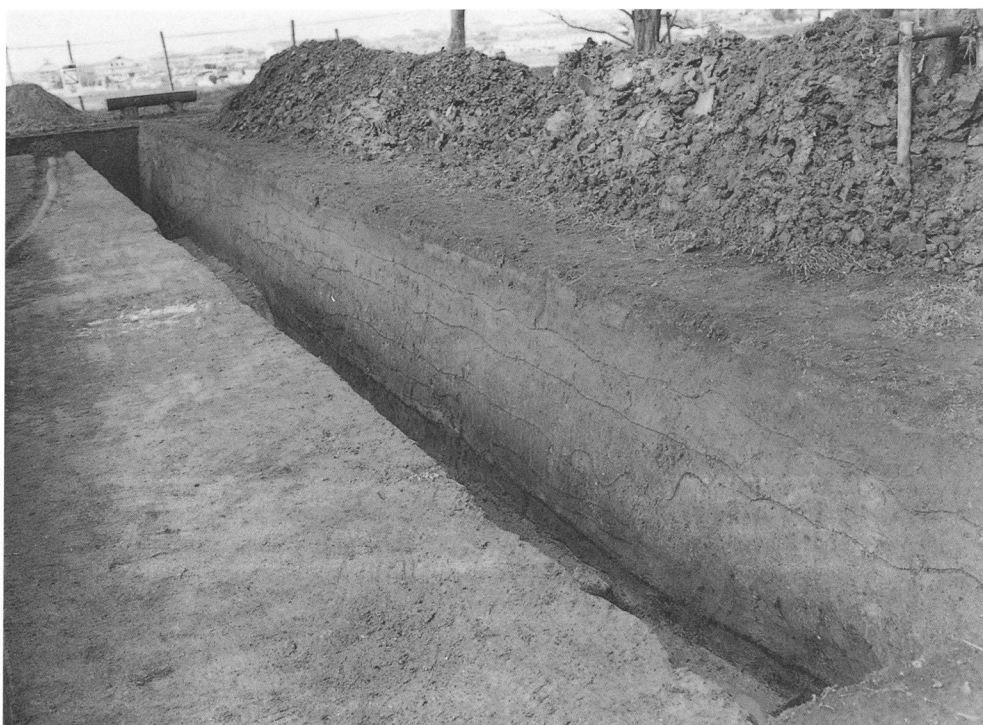
北調査区検出遺構（東から）



北調査区西端盛土（南東から）



南調査区検出遺構（東から）



南調査区北壁土層断面（南東から）

平成12年3月31日©

天理市埋蔵文化財調査概報

(平成11年度・国庫補助事業)

発行	天理市教育委員会
編集	天理市川原城町605番地
印刷	天理時報社
	天理市稲葉町80番地